

勅撰和歌集と天皇正統観

——続後撰和歌集の場合——

今 井 明

はじめに

ここで取り上げ検討する問題は、続後撰和歌集の目録序（残欠）を中心としたものである。できる限り目録序の具体的・個別的な問題の検討から、勅撰和歌集成立の「時代的根拠」といった、より広い視野の中で論を展開するよう心がけるが、こうした言い回し自体、はじめからテキスト離れの大時代的な問題を論じようとするようで、稿者の姿勢が批判されるべきものにうつると思われる。ただし、検討しようとするテーマが、右のような方法を用意せざるを得ない性質のものであることを説明できれば、実は本稿の目的はほぼ達成したといつてよいのである。

続後撰和歌集目録序の問題の要点ははやくに佐藤恒雄によつて論じられている。^①佐藤によれば、続後撰和歌集はその内容的な面、すなわち歌人の撰歌数など撰集の具体的枠組に関しては、父定家の新勅撰和歌集のそれを忠実に継承していることが確認できる、にもかかわらず、目録序において強調されるのは新古今和歌集と続後撰和歌集との類似であつて、新勅撰和歌集との継承関係は特に言及されていない、ということなのである。それはどのような理由によるのか、これが佐藤によつて提起された問題であるが、目録序についての本質的な問題と思われる。

右の問題をいま仮に「内容」と「形式」と二つに分けて整理してみると、続後撰和歌集は「内容」的には新勅撰和

歌集を踏襲しながら、「形式」の面においては新古今和歌集を継承しようとしているということになる。「内容と形式」は矛盾なく統一されてしかるべきであろうが、目録序での為家の位置づけはばらばらで、いわば「形式」的な面だけが強調されているのである。こうした「内容と形式」の矛盾・不統一が見出されるのが、目録序の問題なのである。

何故あえて為家は続後撰和歌集と新古今和歌集との類似を宣揚するのか。むしろ新勅撰和歌集との継承関係を強調すべきではないか、そうした説明手順によってこそはじめて「内容と形式」両面にわたって論理的な整合性が保証されるはずなのである。しかし、実際はわれわれの予測を裏切るかたちで、為家は目録序において新古今和歌集と続後撰和歌集との類似を強調している。

しかし、あらためて考えてみると、われわれには矛盾・不統一とうつつる目録序の叙述が、当の為家には「矛盾」とか「不統一」とは認識されてはいなかった、その点にこそ問題が隠れている。それはわれわれ現代の読者が「矛盾」・「不統一」と認識してしまう、そのこと自体を相対化する、何らかの「論理」を用意しなければならぬ問題であることを示唆している。

では為家の論理は、どのような論拠によっていたのか、

果たしてそれは為家個人のレベルにとどまるような「論理」であったのか、もう一度考えてみたい。

一

まず問題となる続後撰和歌集目録序の本文箇所を引用、確認する。⁽²⁾

元久には親父定家新古今をえらべり。その時撰者五人うけ給るといへども、ひとり和歌所にしてことばをあらためしるせり。これをおもへば、むかし古今集四人うけたまはれるなかに、貫之ひとり御書所にてえらびさだめたてまつるにおなじ。撰者の子たるものつたへてうけたまはりおこなふことかの貫之延喜に古今集をえらびてのち、時文天曆に後撰集をうけたまはるばかりなり。これによりてなしつばのあとをたづぬるに、建長三年辛亥なり。かれも素律はじめていたる月、これも玄英すぎなんとする時也。いまをみていにしへをおもふに、世のためきみのため、これをならぶるにことにあひにたり。あとをたづね、ためしをたづねて、これをくらぶるに、またおなじかるべし。

ここで為家は「撰者の父子関係」を取り上げ、「新古今集における定家と続後撰集の為家との関係が、古今集における貫之と後撰集の時文との関係に符合するものとして、

その類似を強調^③している。こうした叙述内容から推せば、為家は続後撰和歌集を新古今和歌集に直接する勅撰和歌集として位置づけていたと言わざるを得ない。となる

と、目録序の中での新勅撰和歌集の位置は、新古今和歌集と続後撰和歌集を結ぶ関係性から一歩わきにずれた場所に立たされてあると考えるべきで、事実、新勅撰和歌集に関する説明は、

さきの新勅撰集は定家おいの、ちかさねてうけたまはる。そのころをひの哥、ことばをかざりてまことすくなきさまを人おほくこのみ、世みなまなべるによりて、すがたすなをに心うるはしき哥をあつめて、みちにふけるともがら、心をわきまうるたぐひあらば、哥のみち世につたはれとてえらびたてまつれりき。しかるを、わがきみ礼につき文をまもりたまふ時として

も、しき(以下、欠)

といったもので、ここに定着されている新勅撰和歌集像は、撰者定家の「老い」と同時にあるべき「歌のみち」を次代に伝える中継ぎのような、やや消極的な位置に留まるものとしての像である。新古今和歌集と続後撰和歌集を繋ぐ紐帯の強さを前面に出すための、いわば背後の影をなすものとして説明されているに過ぎない。このような、目録序での新勅撰和歌集の消極的な位置づけは、後文が「しか

るを」で接続させられ、当代後嵯峨院の賞賛へと展開させられていく叙述の流れからも裏付けられるのではないかと思われる。

ところが、「はじめに」でも触れたように、続後撰和歌集は内容的な枠組は明らかに新勅撰和歌集に依拠しているのであって、何故目録序で新古今和歌集との類似が強調されなければならなかったのか、この点が疑問として残るわけである。

この疑問に対する佐藤の見解は、以下のようなものである。^④

為家の撰集は、撰者の関係など外在的な類似からは古今集にあたるものを単純に指定できぬ立場にあったはずなのである。にも拘わらず、新古今集だけを指定したこと、またその述べ方自体も、いかにも付会めいている。とはいえ、為家がまともにそう信じていたことを否定するに足る論拠ももちろんありはしない。とすれば、むしろこの際問われねばならないのは、表面の不合理性ではなく、為家がなぜ、内面的には明らかに新勅撰集に拠りながら、表向きには新古今集を持ち出さねばならなかったのかということであろうと思われる。それには、撰者の関係に注目する限り新勅撰集よりも新古今集にはるかに近似していたとか、新勅撰集

の模倣を表だてたくなかったのではないかと、いくつかの直接的な理由を想定できようけれども、根源的には、たとえ晩年の定家がそれに対して否定的な見解を持していようと、父が重要な役割を果たして成った新古今集を完全に無視しえなかったからだと思われる。

佐藤は目録序を支える為家の論拠を、もっぱら為家個人の内部に対する分析・探索によって説明しようとしているが、結論として「根源的には、たとえ晩年の定家がそれに対して否定的な見解を持していようと、父が重要な役割を果たして成った新古今集を完全に無視しえなかったからだと思われる」という結論は少々歯切れが悪く、われわれの疑問に対する明快な解答とは言い難い。

しかし、これはひとり佐藤の限界と捉えるべき問題ではない。問題は、目録序という勅撰集関係のテキストを、筆者個人の人間関係や内面分析などから解読することが方法的には限界があることを示していると考えるべきではないかと思われる。要請されているのは、解読の方法の転換である。ようやくわれわれは為家個人の意識レベルから離れ、勅撰集を支える「論理」を他に求めなければならぬ地点に立たされたようである。

二

続後撰和歌集は後嵯峨院の命によって成った勅撰集であるが、後嵯峨院の時代が新古今時代の再来を思わせる時代であったことは、すでに和歌史上の通説となっている。通説は、後嵯峨院が土御門院を父とし、その土御門院が後鳥羽院を父としている、という親子関係を主たる根拠とし、また後嵯峨院自身が後鳥羽院の事跡を遡及・再現する意図を持っていたことも確認できることから、一応の説得性を持ったものになっている。

こうした時代的な特色を背景にして続後撰和歌集は成立するが、ここでは通説とはまた異なる視点から、後嵯峨院の時代と続後撰和歌集との関係について、本稿の目論見に沿って言い換えれば、後嵯峨院の登場は続後撰和歌集成立にいかなる「論理」的根拠をもたらしたのか、という問題を問い直してみたいと思う。

先にも説明したように、皇統における後嵯峨院の位置について、通常われわれは後嵯峨院の親子関係を考察の出発点におく。ただ、われわれのこうした関係性の把握は、どうも「万世一系」的な天皇観から自由ではないように思われる。言うまでもなく、こうした「万世一系」的な天皇観が中世の天皇観として通底していたわけではないが、しか

し、最も先鋭的に皇統関係を投影すると予測される勅撰和歌集に関する問題の取り上げ方をみても、われわれのアプローチは「万世一系」的な皇統関係から発想しているように見受けられる。現在われわれが行っている和歌史上における各時代の天皇の位置づけもまた、「万世一系」的な天皇観に束縛されているように思われるのである。

皇統における後嵯峨院の位置をあらためて見直すには、いったん「万世一系」的な天皇観から離れ、中世における基本的な天皇観へとわれわれの認識を近づけなければならぬが、「万世一系」的な天皇観にかわる天皇観としてここで導入されるべきものは「天皇正統観」と呼ばれる、中世の天皇観であろう。

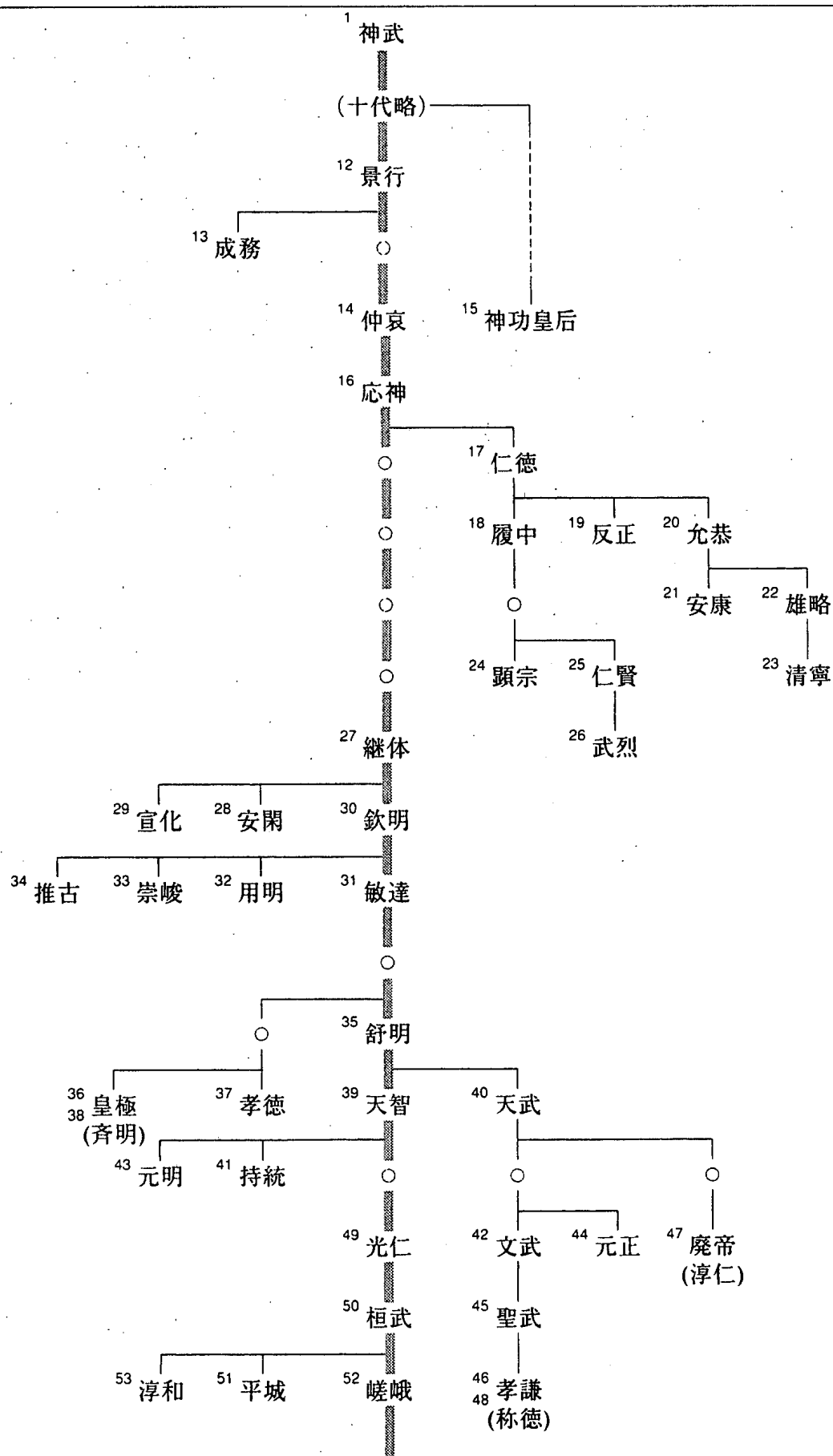
「天皇正統観」に関する説明的な説明は割愛するが、その基本的な理念は、『神皇正統記』に見出されるもので、そこでは皇統の系譜が二種類に分けられている。『神皇正統記』が「これより世を本とし奉べき也」と述べるように、「第〇〇世」と記されるものが「まことの継体」を表すものとされ、それとは別の「第〇〇代」と記されるものは「凡の継体」を表すものとして区別され、皇位継承の系譜は「真実の皇位継承」と「一般的な皇位継承」の二つに分けられている。そうして「第〇〇世」と記された天皇の系統が「正統」の「真実の皇位継承」をなすもの、とい

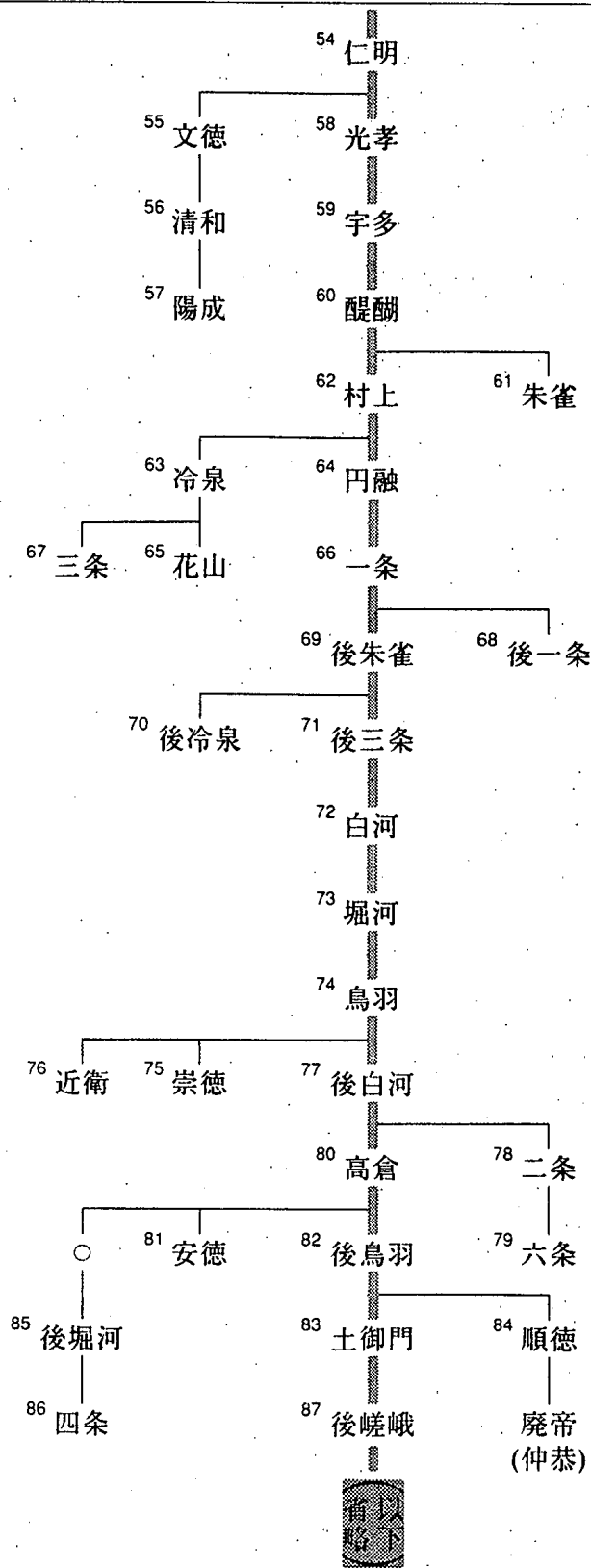
う天皇観に基づいて表されているのである。⁽⁵⁾このような天皇観を中世の和歌史の問題に適用するには、やはりその是非を見きわめておく必要がある。天皇正統観を表した基本的な文献テキストは『神皇正統記』であるから、本稿が考察対象とする続後撰和歌集が成立した鎌倉時代にまで遡って「天皇正統観」をその時代の問題に当てはめてよいのかということがあるが、慈円の『愚管抄』にも『神皇正統記』と重なる「正統」意識に基づく天皇系譜の記述を見出すことができる。⁽⁶⁾勿論、こうした天皇観は慈円と親房二人に留まる特殊な天皇観と極論することもできようが、慈円の『愚管抄』中の記述は、個人的・独創的な見解が求められる場所ではなく、むしろ一般的な認識を示した箇所であると考えられ、親房や慈円の天皇観は中世一般の天皇観の認識に繋がるものと考えて問題ないと思われる。むしろ、これから扱う問題自体が、中世においては「天皇正統観」に基づく時代認識が確かに生きていたことを証しているように思われるのである。

それでは、まず『神皇正統記』（および『元元集』）に基づいて、「天皇正統観」に拠る天皇系図を掲示しておく。ただし、ここでは取り扱う問題の範囲を後嵯峨院の登場までとしたので、天皇系図も後嵯峨院までのものとした。⁽⁷⁾

左の天皇系図で太い幹を形成しているのが「正統」理念

表1 「正統」の理念による天皇系図（『神皇正統記』の場合）





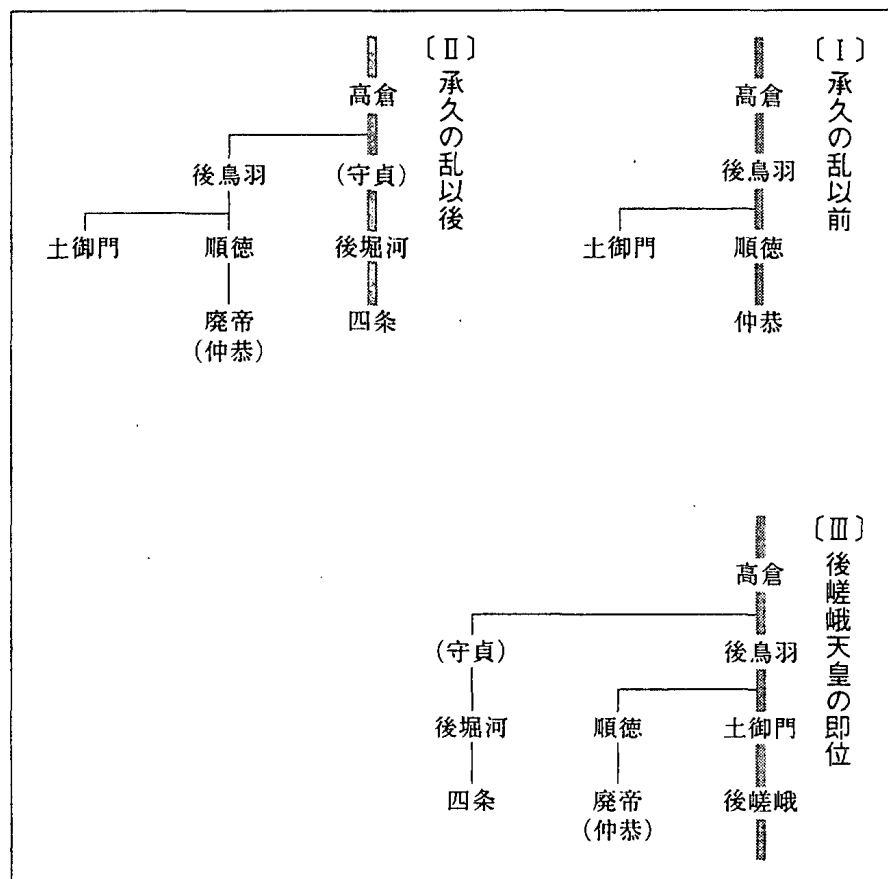
に該当するわけであるが、この系図でわかるのは、後嵯峨院の前代の天皇である後堀河天皇・四条天皇は「正統」から外れ、その系統は断ち切れていることである。「万世一系」的な天皇観からは、このような天皇の系譜の断絶が意識されることはないのでなかろうか。

また、右の系図からは、後嵯峨院の登場によって、後堀河・四条天皇の系統が「正統」から外れるのとは対照的に、後鳥羽院・土御門院の系統が「正統」の幹をなす位置を占めていることもわかる。このように「正統」天皇系図を分析してみると、後嵯峨院の登場は、それまでの天皇の「正統」の系譜に大きな変更をもたらしたのではないかと予測されるのである。

この、後嵯峨院の登場が「正統」系譜にもたらした問題については、すでに河内祥輔氏の論考があるので、それに従って問題を整理しておく。問題を理解するには、承久の乱前後に遡って「正統」の変遷をまとめておく必要がある⁽⁸⁾ので、氏の論考に従って関係図を引載する。

〔Ⅰ〕「承久の乱以前」が新古今時代の天皇「正統」系図である。後鳥羽院の系統が「正統」の幹を形成しており、もし承久の乱が後鳥羽院側の勝利に終わっていたら、順徳天皇・仲恭天皇が「正統」を継承したはずである。ところが、後鳥羽院の敗北に終わった〔Ⅱ〕の「承久の乱以後」になる

表2 承久の乱前後における「正統」の変遷



と、後鳥羽院の系統は後堀河天皇の即位によって「正統」の幹からいったん外れてしまう。これが新勅撰和歌集が成立した定家晩年の時代に該当する。事態はさらに急展開して、四条天皇が後嗣のないまま亡くなり、土御門院を父とする後嵯峨天皇が即位する〔Ⅲ〕「後嵯峨天皇の即位」と、「正統」から外れていた後鳥羽院の系統（限定的には土御門院を指す）が「正統」の幹に返り咲いてくるのである。この後鳥羽院の系統が「正統」に戻ってきた時代が、われわれが新古今時代の再来と認める後嵯峨院の時代である。

これらⅠ・Ⅱ・Ⅲ、三つの天皇「正統」系図を、それぞれの時代に成立する勅撰和歌集の問題に照らし合わせて見てみると、例えば新勅撰和歌集における後鳥羽院・順徳院・土御門院ら後鳥羽院系統の上皇の和歌排除の問題、あるいは本稿で問題としている続後撰和歌集と新古今和歌集の関係など、「天皇正統観」に基づく皇統系譜の変遷が、それらの問題と連動していることに注意すべきではないかと思われるのである。これは天皇の系譜が何の断絶もなく続いていくかに見える「万世一系」的な天皇観からは出てこない視点であると考ええる。

三

続後撰和歌集という集名は、後撰和歌集に準拠している

ことは明らかであるが、では、続後撰和歌集が古今和歌集に見立てているのは、新古今和歌集かそれとも新勅撰和歌集のどちらなのであろうか。この問題については現在、新勅撰和歌集がそれに該当するという説の方が有力なようである。

しかし、続後撰和歌集目録序における為家の叙述を追う限り、続後撰和歌集撰者の立場と関係づけられているのは、あくまで新古今和歌集撰者であった定家であり、新勅撰和歌集撰者の定家の立場ではない。とすれば、続後撰和歌集が古今和歌集として見立てているのは新古今和歌集であったと考えるほかならないのではなからうか。

いったいこのような為家の叙述の論理は、どのような「論理」に拠っていたのかと言えば、それは先に確認したような、天皇の「正統」の系譜があつたのではないかと、との仮説を提示してみたい。〔Ⅲ〕「後嵯峨天皇の即位」の示すとおり、後嵯峨院の即位によって確かに後鳥羽院の系統は天皇「正統」の位置に返り咲くが、後嵯峨院からすれば後鳥羽院の系統の存在があつたればこそ自分が「正統」の系譜に立つことができたと言えよう。後鳥羽院の系統は後嵯峨院にとって「正統」の天皇であることを証す根拠でもあつたのである。「天皇正統観」から見る限り、後嵯峨院と後鳥羽院の系統との関係は、単なる血縁関係以上の意味

があり、両者はそれぞれが「正統」を根拠づける強力な関係を形作っているのである。

このように後嵯峨院と後鳥羽院系統の天皇との関係を捉えてみると、後嵯峨院が後鳥羽院の時代を積極的に遡及・再現しようとした意図も、単なる血縁関係による後嵯峨院の個人的な意志・志向というよりも、後嵯峨院が登場した時からそれは期待された、時代の要請するところであったのではなからうか。後嵯峨院の時代は、後鳥羽院の時代が「正統」の御世であったことを証し立てなければならぬ時代であった、という意味で。

後嵯峨院の勅命による続後撰和歌集の撰進は、後嵯峨院が「正統」の皇統に立つ天皇であることを証し立てることを、真つ先に求められたはずである。続後撰和歌集は、新勅撰和歌集が排除した後鳥羽院・順徳院・土御門院ら後鳥羽院系統の上皇の和歌を撰入させてくるが、この撰歌は単に後嵯峨院の父である土御門院の歌を為家が「重視」したためといった、撰者の個人的な立場をもって解釈すべき事象ではあるまい。後嵯峨院の「正統」を証すためには、後鳥羽院系統の上皇の和歌が続後撰和歌集にはどうあっても存在しなければならぬのである。

続後撰和歌集における為家の撰者たる根拠は、どこに求められるか。それは下命した後嵯峨院の立場をなぞるよう

な「論理」によって説明されるべきものであったはずである。そこで為家がおのれに要請した根拠とは、後嵯峨院と同じように後鳥羽院時代にその論拠を求めたのではないか。具体的には新古今和歌集の撰者であった父定家の立場との関係性を強調することによって、為家もまた「正統」たる時代の継承者であることを宣揚したのではなからうか。ここにおいて、勅撰和歌集の下命者である上皇とその撰者は、論理的一体性を保証されることになった、と考えられるのである。

おわりに

佐藤恒男が明らかにしたように、続後撰和歌集は撰集の枠組としての規範を新勅撰和歌集にもとめた。その点については全面的に佐藤の結論に従うべきで、何ら異論を差し挟む余地はない。しかし、目録序の叙述の論理は撰集の具体相とは全く別の位相に立つ問題として考えるべきである。内容的な関係から、続後撰和歌集が「古今和歌集」と見立てた勅撰集を新勅撰和歌集とするのには、やはり無理がある。

目録序において、撰者たる為家が自己規定としてもとめた根拠は、新古今和歌集における父定家の立場であった。繰り返しになるが、その論理的要請は、後嵯峨院の皇統に

おける立場の反映そのものであった、と考える。両者に通底していた論理的根拠は、中世の天皇観である「天皇正統観」ではなかったか。後嵯峨院も為家も、そのような「天皇観」から離れた、自由な立場が与えられていたとは考えにくい。実際、「天皇正統観」による皇統系譜上の後嵯峨院の位置は、われわれが問題としてきた後嵯峨院時代の様々な問題と対応している。われわれが無自覚に前提としている「万世一系」的な天皇観からは見えにくい問題を、「天皇正統観」はよりはっきりとした形で浮き彫りにしている。中世の天皇に関する問題、例えば勅撰和歌集などの問題を考察するには、「万世一系」的な天皇観はかえって問題の所在を隠蔽しかねない危うい先入観である。

われわれは、続後撰和歌集目録序の叙述に「矛盾」や「不統一」感を抱いてしまう現代人であった。それは何故か。中世のテキストを中世の論理に沿って読むには、われわれから欠落している視点がまだあるのであろう。しかし、ここではわれわれの「読み」を変えるために、われわれの先入意識に関わると思われる問題を一つだけでも明らかにしようと試みたのである。

注

- (1) 佐藤恒雄「続後撰和歌集の撰集意識―集名の考察から―」(『言語と文芸』五七号 一九六八年三月)
- (2) 樋口芳麻呂「続後撰目録序残欠とその意義」(『国語と国文学』第三六卷九号 昭和三四年九月)
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 河内洋輔『中世の天皇観』(日本史リブレット22、二〇〇三年 山川出版社)
- (6) 日本古典文学大系『愚管抄』四三頁参照。
- (7) 注(5)に拠る。ただし、省略した部分がある。
- (8) 注(5)に拠る。